

令和6年度第7回高知県不登校児童生徒の多様な教育機会確保に関する協議会  
＜議事概要＞

日 時 令和6年10月22日（火）10:00～11:30

場 所 高知県人権啓発センター 6階 ホール

1 開会

◆教育長挨拶

◆委員長挨拶

2 議事

- (1) 中高生等の居場所「Kochi Teens Base」について
- (2) 校内サポートルームについて
- (3) 「誰もが学びやすく居心地のいい学校づくりに向けたアンケート」の途中結果について
- (4) 「児童生徒の多様な教育機会確保」についてのまとめ

（以下記号：協議会委員○、事務局●）

- (1) 中高生等の居場所「Kochi Teens Base」について

資料1 中高生等の居場所「Kochi Teens Base」について

- (2) 校内サポートルームについて

資料2 校内サポートルームについて

- (3) 「誰もが学びやすく居心地のいい学校づくりに向けたアンケート」の途中結果について

資料3 誰もが学びやすく居心地のいい学校づくりに向けたアンケートの途中結果

- アンケート結果を見ても、子どもたちが能動的に答えている。
- 中高生等の居場所「Kochi Teens Base」も学生ボランティアさんや校内サポートルームの指定校の先生方の支援について研修などはどのようにされているか。
- 校内サポートルームのコーディネーターについては、不登校担当者の研修会として、年に2回、児童生徒理解やサポートルームの運営の仕方について研修を行っている。  
また、指定校11校全てを訪問し、コーディネーターの悩みも聞きながら、改善できるところは一緒に改善するという形である。
- 「Kochi Teens Base」の学生ボランティアについては、県立大学との連携協定、締結式、正式な開設まで少し時間があったため、開設準備等で、学生に集まってもらい準備をしながら注意点などの研修になるような形で話をする機会を設けた。
- 「Kochi Teens Base」もサポートルームも非常に良い取組をされてると思うが、その取組の中での事例分析等を関連団体等の施設に公開していただくことはあるのか。

- こういう傾向にあるお子さんにはこういうふうに対応をしたという事例を一概にマニュアル的にはできないが、実践として得られることやコーディネーターの支援の在り方、子どもにとって落ち着いて過ごすためにどのような環境が必要かということについては、委員の先生方から頂いた意見も含めて、ガイドラインにできる限り提示をしていく。
  - 学生ボランティアについては、やはり大学生だったら誰でもということではなくて、社会福祉学部で、将来そういった福祉系を目指す学生に、まずは関わってもらいたいということで、ある程度専門知識を身に付けていたり、現場で実習にも参加しているような学生を選び、本人の意思で入ってもらっている。

実際に子どもたちが来てくれるようになってからも、心の教育センターのスタッフの方が、温かく子どもたちを迎えている様子を学生も見てモデルにしながら関わっているところがあり、学生にとっても非常に有意義な時間になっている。
  - 子どもたちの一番初めのアクセスはどうなっているのか。利用の流れは、電話で面接予約ということだが、どんな感じで広報されているのか。

また、校内サポートルームのところも、サポートルームがフィットする子どもとそうでない子どものアセスメントについても含めてどういうふうに子どもたちを見取って、どの支援につなげるのが一番いいか、またどこかで教えていただきたい。
  - アンケートについて、中間とはいえ、非常に興味深い。学びの多様化学校の視察の際に、各関係者の方が、できる限り強制はしない、子どもたちが自分で選ぶことが重要、融通性を高める必要があるという話が出たことを思い出し、やはり受けたい授業を自分で選べるや1人で学べる、登校する日や時間を自分で決められるということが、非常に重要なということが、改めてこのアンケートからも見て取れる。やはり、教科書の内容を学びたいという回答結果からみんなと同じように勉強したいという気持ちは、十分に伝わってくるところ。
- 一方、保護者の方も学年に関係なく苦手なところから学ぶという回答結果から自分が学びたい部分から学べるということに重点を置いていることについては少し注目して置く必要がある。

● (4) 「児童生徒の多様な教育機会確保」についてのまとめ

資料4 重層的な支援体制の整備・強化による不登校対策について

(これまでにいただいた意見)

**協議のまとめ**

- 先生方の意見の中で注目されていたことは、チームの連携が重要であるが、その点については強力な支援が必要であるという意見であった。支援については、教育委員会からの支援あるいは心の教育センターのハブとして動くことも必要だろうという意見があった。

もう1つは、学校全体の子どもたちも含めたメンタルヘルスの重要性。SOSの出せる環境の整備ということで、子どもたちが安心してSOSを出せ、受けとめてもらえるという安心感が、子どもたちがSOSを出せることの環境醸成につながり、SCやSSWを含めて先生方の

受けとめる側の育成に働いていく、そういったプロセスがあるという点で、やはり子どもたちも含めた学校全体での環境整備や学校の組織づくりが重要である。

そうしたときには、校種や学校段階ごとの特徴に学校の特色と合わせた支援体制の整備は、少し整理が必要である。

関わる人材育成の支援は大変重要であるため、チームを作るにしても、連携するにしても、先生方に限らず関わる人材の育成が重要である。

資料4について、タイトルについては、「重層的な支援体制の整備・強化による不登校対策」ではなく、「多様な学びの機会確保について」でいいのではないか。やはり学校は、教育提供とか学習提供の機関であることは間違いない、子どもたちは通いやすい魅力ある学校の中で学んでいけることがいいだろうということも間違いない。

子どもたちの状況や家庭の状況が多様化して、子どもたちの学び方も多様化して中で、学校に行けないという言い方ではなく、学校で提供されているのとは違う学びの方が、その子にとっては学習が保障される。

学校での学びの優位性を認めながらも、多様な学習機会の保障が現代的な教育提供の在り方とすると、不登校対策についてと表さず、「多様な教育機会の確保」という示し方でいいのではないか。それに合わせて、魅力ある学校づくりの不登校を生じさせない学級・学校づくりのところも、「不登校を生じさせない」よりも「全ての子どもたちが安心して学べる学級・学校づくり」、とかでもいいのかなという、ポジティブな方から入っていいのではないか。高知県は、全てのどんな状態の子どもたちに対しても、何らかの形で学びを保障していくという全体のトーンとしてあるといい。